

講演：高嶋伸欣さん（2014年12月10日）

本日は、このような機会をいただきありがとうございます。始めに自己紹介から入らせていただきます。私は、高校で長いこと社会科の教員をしております、その授業のための教材作りということで、東南アジアの方にたびたび出かけておりました。



私が歴史的话题によく首を突っ込むものですから、高校では歴史の授業を担当していたのではないかと思われる方も多いようです。でも、実は専門は地理教育です。

そしてその教材研究の結果を授業の体験を踏まえながら教科書に書いたら、検定でその原稿はだめだと却下されたので、それは納得いかないということで横浜で教科書裁判まで起こしました。そこで在学していた東京教育大で家永さんの歴史研究の指導を受けたんだろうと推測されて、ネットなどの情報では家永さんに師事したというような個人情報広がってしまっています。けれどもそうではありません。

東京教育大学、いまの筑波大学は他の国立大学と同じですが地理の講座は地形学、気候学から先に開設されましたから理学部に置かれています。東大、東北大、九州大等もそうです。私は社会科の方の人文地理を学習したかったのですが、大学入試では理学部を受けなくてはならなくて、数学、理科を余分に勉強させられまして一回では無理かなと思っていたのですが、うまく滑り込めたのでそのまま希望通りの勉強をしました。

ですから私は社会科の教員になるための関連科目ということで文学部の講義をいくつかとりました。家永さんの講義は2コマ位取った記憶はあります。しかし、家永さんにゼミで直接指導を受けるという関係はありませんでした。もし師事したという情報を

聞かれることがあったら、違うんじゃないということをお願いしたいと思います。

ところで、地理を担当している人間がなぜこんな歴史的なことに深く関わっているのだと、疑問に思われるかもしれません。一つには古いタイプの地理観で、そのように思われるのかなという気がします。地理教育というのは国際理解を生徒に進めさせるという科目です。私がアジア学習とくに東南アジア学習を授業でやらなくてはと思いながら、高校1年生の生徒たちのアジア観はどんなものか、ということでアンケート調査をしたことがあります。そうすると、生徒が家族から聞かされるアジアの話も積極的な話があまりなくて、経済的には貧困で、不潔で、犯罪が多くて、遊びに行けるような所じゃない、アジアのことを勉強するのにわざわざそんな時間をかける必要はない、というようなイメージの答えでアンケートが埋まっていました。

私が教師になったのは1968年でもう半世紀以上前ですが、そのころアジアに旅行に行く人はほとんどいませんでした。60年代高度成長にあわせて海外旅行がずいぶん自由化されていた時期です。たとえば、東京都の教職員組合が夏休みに海外旅行を組合で用意していました。ジャンボ機をチャーターして一斉に数百人で目的地に行き、そこでコース毎に分かれて、1週間か10日後に集結地に集まると迎えるジャンボ機が行って連れて帰って来る。こういうことを大々的にやっていたのですが、その目的地がヨーロッパと米国だけなのです。そこで教職員組合の人に、報告会で話を聞いた後で「なぜアジアに行かないのですか」と尋ねました。「アジアに行くコースを組んでも組合員が集まってこない」と言われました。教職員組合に参加している教員の間でも、1970年前後というのは、アジアに行こうという気が起きない、アジアを授業で積極的な話題にしようという姿勢もほとんどなかったのです。

そのとき生徒のアンケートを見て、これでいいのかと考えました。そういうものではないはずだ、ましてアジアの中で高度成長している日本が優秀な民族だと、福沢諭吉以来の「脱亜入欧」の考え方でいいんじゃないかと内心では思っている、家庭での大人の会話をそのまま生徒は受け入れているみたいだという様子がみえたので、それをどうやって改めたらいいのかなと思いました。「間違っているよ。」といったら生徒はレポートや試験の答案などでは、私の顔色を見ますから、そういう答え方をしたいと思います。生徒にとっては、教師は成績評価権をもっている権力者ですから、その教師に合わせた書き方、答え方をするわけです。

これにつきましては私は生徒に「どんな答え方をしても筋が通っていれば点数をあげよ」ということを言っていました。けれども、小学校以来の経験が下地にあるせいか、

それを言葉通りになかなか受け取ってもらえませんでした。私が定期テストの点数と夏休みの宿題のレポートをそれぞれ 80 点ずつ、1 年間で試験 4 回とレポートで 400 点満点ということにして、「合計点がこの何点から何点だったら 5 だよ。4 はこの点とこの点の間だ」ということを、通知表を渡す前に説明してきました。前期の成績が渡ったのを生徒が確かめたら、高嶋は言うとおりにやった、高嶋の反発するようなことを言ったり、答案に書いたりしても、それがマイナス点にはならなかった、ということで、ようやく信用してくれたようです。

後期に入ってから雑談しているときのことでした。「先生には本当のことを言ってもいいらしいけど、ぼくらは小学校から先生の顔色を見る訓練を受けてきた。ぼくらは学校でスイッチヒッターにされているんだ。この先生は右投げか左投げかというのをまず見極めて、この先生には、右バッターボックスに入るか左バッターボックスに入ろうかと決めるようにされてきたんですよ」とある生徒がそう言ったんです。そうすると周りにいた生徒が「そうだそうだ。お前いいこと言うよ。」と次々に同調して、それについての話題が広がったんです。私は「やっぱりそうか。君はとてもいいたとえ話をしてくれた。この話あちこちで使わせてもらうからね。」と言って、今日もみなさんにこうやって紹介しているのです。思い当たる方は多いのではないかという気がします。

さきほどの話にもどすと、アンケートに出て来たアジア観は、本当は困るんだ、間違っていると思うんだといっても、それだけでしたら生徒に対しては説得力がありません。ただ高嶋にいい成績をもらうために、それに合わせた答案やレポートの書き方をしようというので終わってしまうというわけです。

それでは困るから生徒がじっくり自分の頭で考えて、そういうアジア観は間違っているのだということに気づいてもらう材料を用意できないかなと思っていました。すると機会ができました。1975 年ですが、私の兄が外務省に出向して、バンコクの日本大使館に書記官として勤務することになったのです。「3 年間いるから来いよ」と言ってくれました。これはチャンスと思いました。夏休みに、バンコクへ一人で行って、陸続きのマレー半島を鉄道とバスを使って南端まで往復するという旅行をしました。1975 年のことです。

その時はまだ地理の教師という意識が強くて、マレー半島でゴム園やスズ鉱山の写真を撮ればいぐらいに思っていたのです。農村部に入ってゴム園の写真を撮っているときに昼頃になったので、村の中の食堂に入りました。マレー語での料理は分かりませんから、土地の人が食べている料理を見て「これと同じのを。」と指さして注文をしまし

た。すると店の人は、「これ、辛いぞ。」という意味の仕草をしてくれるのですね。それはやめたと、指でバツを作って「ノー」と言ったら、「OK」と言って、すぐ調理にかかってくれました。

そのうちに「お前はどうも日本人らしいな。」と声をかけてくれて、「こんなところに日本人が来るのはめずらしいのだけれど、戦時中にこのあたりで日本軍が住民を殺したのを知っているのか」という意味のことを言い出したのです。私は多少そういう旅行記を読んでいたんで、そういえばそういう話はあったなと思いました。そこで、「少しは知っているけれどもしっかり知っているわけではない。」と言いますと、店の人が、「じゃ証拠を見せてあげる」と言って、時間を割いてくれて、車で街の中に連れて行ってくれました。それは、マラッカの街中の観光名所になっている「提督の井戸」があり、東南アジア最大の中国人墓地があるお寺の隣にある非常に立派な追悼碑でした。後で確かめたら、蒋介石が題字を書いたものでした。説明板の中国語を拾い読みしてみると、ここは日本軍が住民虐殺をやった、その犠牲者たちの追悼碑だとありました。その追悼碑の周りの地面の下には骨が埋まっている、つまりお墓でもあるということが後で分かってきました。

そういう事実初めて直面させられたものですから、これは急いで調べなければいけないと思って、その旅行から帰って、日本国内で意識してそういう関係の本を捜しました。さらに事情を知っていそうな方、朝日新聞の松井やよりさんや「アジアの女たちの会」の他の人たちにもお願いをして様子を聞きましたら、断片的な情報は結構集まってきました。けれどもまとめてマレー戦線での虐殺事件を調べている人はいない、ということが分かりました。中国での虐殺事件はよく知られているが、このマレーの事件も誰かが調べなければいけない、体験者のみなさんは高齢だから証言を聞くには急がなければならぬという気持ちになりました。そこで、松井さんとも多少コンタクトがありましたから、本多勝一さんに「中国に続いて東南アジアを調べる気はありませんか、と聞いてください」とお願いしました。「本多さんは、中国の問題だけで手一杯だ。東南アジアは別の人にやってほしい、と言っている」という話しが返ってきました。

だれかやってくれないかな、と言っている内に、松井やよりさんが「私がやるわ。」と言いました。シンガポール特派員を志願して3年間あちらに行かれるということになりました。でも、それは先の話です。それまでに、誰かが行かなければいけないなと思いながら、なかなかこれはという人が見つかりませんでした。それならば、とりあえず自分で行けるだけ行こうと思って、毎年1回手探りでマレー半島を往復するということを重ねていました。そこへ82年のあの「侵略」を「進出」と書き換えた、教科書

検定が外交問題化する事件が起きたのです。

あの事件については産経新聞などが、その年の検定では「侵略を進出と書き換えさせた」例はない、それをあつたというふうに一部のマスコミが大騒ぎしたのであって、本来ならば間違った騒ぎなのだ、という「誤報キャンペーン」をやっています。けれども東南アジアの日本軍の行動に関して書いた帝国書院の世界史教科書では、その通りの事例が起きていたのです。「侵略」と書いたら、検定官が「それは使うべきことばではないということであるし、すでに10年来書き換えさせているから、今回もだめだ。」と言ったのです。帝国書院の方はしかたがないから、「侵略」を「進出」と書き換えたのです。その証拠になる検定に出した白表紙本と後から書き換えて検定を合格した見本本の現物を、私はもっています。「数年経ったので必要ないよ」と、出版社の方がくれたのです。それをTBSの番組で紹介したことがあります。その時は、検定問題で対決することになっていた検定官が、「そんな証拠が出てくるのであれば、もう番組に出ない」と言って収録直前に騒ぎになりました。プロデューサーが「悪いけどこの話少しおさえてもらえますか」と言うので、画面にはその教科書を出しましたけれど説明はほとんどしないということがありました。「誤報キャンペーン」というのがいまでも時々出てくることがあります。その時には、『侵略』を『進出』に書き替えさせた例があつたはずだ」ということを周りの方に伝えてもらえたらと思います。

話をもどしますが、その82年の「侵略」を「進出」と書き換えた検定が行われたということが中国や韓国その他の近隣諸国の人に伝わったのに合わせて大問題になったわけです。中国や韓国が日本政府に正式な外交上の抗議をしたということで、マスコミは政府同士のやりとりがどうなっているかという形の報道を連日やっていたと思います。当時、私たち社会科の教員たちの研究会には、教科書執筆に参加しているメンバーがかなりいました。私も地理の教科書執筆に加わり始めた時期でした。その研究会では、アジアの人たちは日本政府に怒っているだけではないと考えました。過去10年間そういう検定が行われていたことを教科書執筆者など関係者は本当は知っていたのに、結果的にはそういう検定指示を受け入れていたのではないか。日本の教科書執筆者やその教科書を使っている教育関係者等に対しても、それでいいのですかという責任追及をしているのではないかと、受けとめたのです。

あれは政府の責任、そういう決定をやった政府がけしからんということで、日本国内の私たちが見ている話ではないというわけです。では、私たちはどう責任をとったらいいいのか。ただ「進出」を「侵略」に戻せばいいということではない。それに見合っ

た中身のある学習をきちんと教科書を使ってやっています、という状況を作らなければならぬということになりました。

そこから、中国戦線のことに関しては本多さんたちの仕事があるから材料は豊富にあるけれども、東南アジア戦線ではどうだったのかという話になりました。地理の教師の会で、私が毎年東南アジアに行って、断片的だけど、こういう事実を現地の人から教えてもらっているという話をしたところ、地理の教師たちで、とにかく現地に行こうということになりました。82年の騒ぎのあったその秋の会合でのことでした。研究会でマレー半島でそういう事実を確かめるツアーをやるから、案内役をおまえがやれということです。私もそろそろ人数を増やして多くの情報を得られるようにしたいと考えていた時期でした。今から考えるとよくやれたと思うのですが、バンコクからシンガポールまで、マレー半島のタイ領とマレーシア領の境にあるペナン島の対岸のバタワースまで夜行列車で行って、そこからバスをチャーターしてシンガポールに行くという、距離にして2000キロ位になる旅行をしました。バンコクからは映画「戦場にかける橋」で有名になったカンチャナブリにも寄る、2週間を超えるぐらいの日程です。

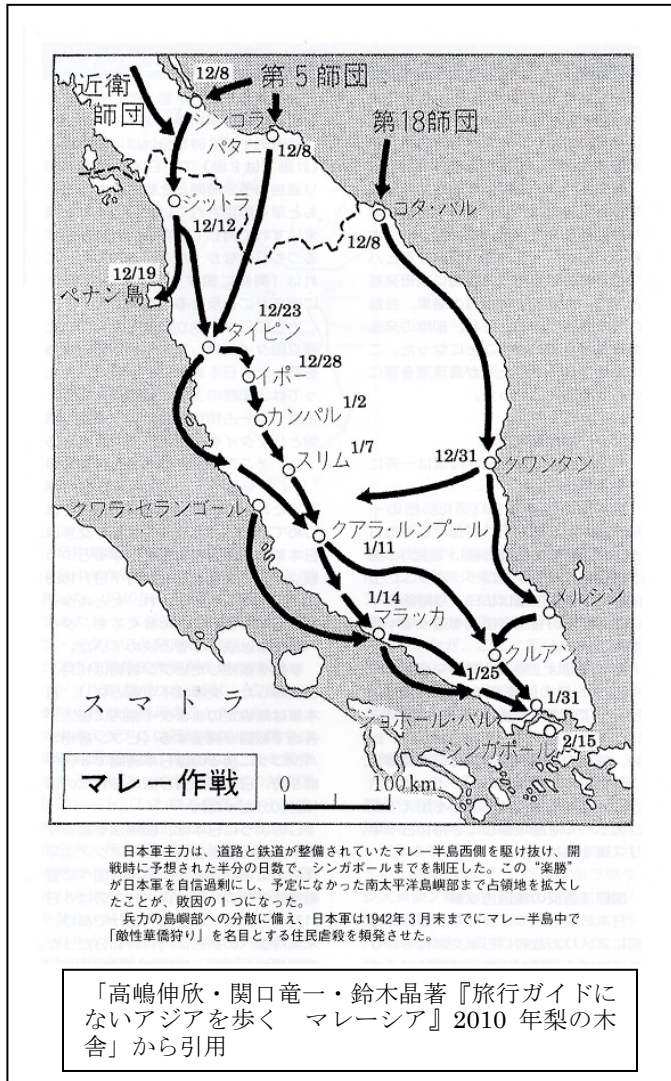
教師が夏休みにそんなに時間がとれるかなあと思いましたが、初めの3年間は30名くらい参加がありました。参加費も30万円位かかりました。さすがに4年目、5年目になると人数も減ってきたし、やはり長期間はきついということで、5年間やったところで一区切りにしました。その後も材料を集めたりしているうちに、この間行けなかったけれど、やっぱり行きたいという人が結構いるという事が分かってきました。また数年後から再開しました。今度は、夏休みに1週間から長くても10日で済むようにして、マレー半島のマレーシアの部分を中心に見て回るという形が主になりました。それでもやっぱりまわりきれないので、春休みや連休などに合わせて年に数回出かけたり、ツアーを重ねてきました。今年(2014年)の8月で40回目になりました。40回目だし、私も年だからもう区切りにさせてもらおうかと思っていたのですが、現地の方から戦後70年の来年もやるんでしょねと釘をさされました。「やります」と答えてしまいました。

実は私たちも現地と交流を重ねてきています。政府が主催している8月15日の武道館の追悼行事に対抗して、加害者である日本人が現地に行って追悼行事をやるべきではないかという声を、1985年8月15日の中曽根首相の靖国参拝直後に大阪の人があげていました。その大阪の人たちに呼応して、大阪の人たちは追悼集会を大阪でもやるが、現地集会の東南アジアの部を私たちが担当する。同時に南京やソウルでもやる、ということにしたのです。そうすると観光客が多くて飛行機代もホテル代も上がってしまう8

月 15 日のピーク時に東南アジアに行かなければならない。割高になります。現在は旅行会社を通さないで LCC の飛行機などを個人で予約して現地集合・現地解散、自分の都合にあわせて途中参加・途中離脱それも自由です、ということにしています。来年のプランもそろそろ作らなければならぬと思っています。40 回重ねてきた中で現地の方といろんな付き合いも深まりました。そこまで積極的ならば本心を語ってあげるよ、ということもありました。やっぱりそれが本心だったのですか、という思いもさせられたりしているわけです。

さて、本題に入る前に資料のことですが、私の資料は、学校で使った教材用の流儀で作っています。私が最初に着任した、東京教育大付属高校では教科書通りの授業をやるな、実験的な授業をやれということでした。私は大学院を終わってすぐそこに着任しました。教頭のところに着任のあいさつに行きましたら、「ああ教育実習に来たね。もう顔は分かっているよ。承知しているだろうけどうちの学校は実験的な授業をやる学校だから、教科書通りはだめだよ」と軽く言われました。それが着任した日です。もっと早く、数カ月前に言ってほしいと思ったものです。それでも「教師は授業が勝負だよ。授業の中身を作るためには時間が必要なので、3 年間は担任なし。クラブも副顧問にしとくから授業づくりに集中しなさい」と言ってくれました。まだ独身で時間の自由もありました。しかも 24 時間出入り自由の学校でした。そのまま学校に泊まり込んで机の上で寝てしまうということなどをやりながら、授業づくりをやり、生徒にはプリント中心の授業をやりました。

その時の授業プリントもこの中に 1, 2 枚入っています。大学に行ってもそれを使ったりしました。ところで生徒からある意見が出されました。「高嶋はプリントを使ってやるのはいいけれども、先生は都合のいい所だけ新聞や単行本の文章を引き出しているのではないか、その前後の文脈で、この注目してほしいという記述のところが正しい読み方をしているのかどうか、それを僕らもチェックさせてほしい」という授業批判の声でした。「それはいいこと言ってくれた。しかし、それは当然プリントの枚数は増えるよ」と言いましたら、「それは構わない」と数人の生徒が言って、ほかは沈黙していたので、そのようにプリントを作ることにしました。結局、私の授業は週 3 回だったのですが、1 年間でプリントが 200 枚ぐらいになりました。B4 のものを二つ折りにして簡易ファイルにして大体 2 冊から 3 冊。「高嶋のプリント洪水」と言われました。生徒は、もう先輩から言われているから違和感なく受け付けてくれました。私も新年度の授業のはじめのオリエンテーションで去年の分はこれだけだったからと現物を見せつけまし



た。生徒もそんなもんかなというふうに受け止めてくれていました。

そこで、私は今もおプリントを使って説明をするという流儀を続けております。みなさんにも、今回も10ページ分用意しております。こまかく全部はとても触れきれないと思いますので、残ったところはまた時間のある時に見ていただけたらと思います。みなさんがあまり目にすることがない資料がかなりここには入っていると思います。こういうことがあるのかということでも参考にしていただけたらと思います。

さて、ようやく本題に入りますが、資料の1ページ目です。

安倍首相が来年の8月15日に「70年談話」を出すといっています。中身がどうなるか、日本の人たちは黙って見ているつもりはないでしょうね、と東南アジアの人たちに釘を

さされている雰囲気を感じながら戻ってきました。

安倍首相が、今、南京事件に関しても、「従軍慰安婦」の問題に関しても、歴史修正主義といわれる人たちの先頭にたって、ああいう歴史的事実はなかったというような話を日本中に広げています。そのために南京事件などマスコミでも扱い難しくさせる、さらには歴史教科書等でもそういうことに関する記述をトーンダウンさせる、あわよくば、一切触れさせないようにしようという取り組みをしぶとくやっています。

自民党が選挙で掲げた公約のなかで「自虐史観」という言葉が使われたのが、前回の衆議院選挙、第二次安倍内閣が成立した時の2年前の選挙です。「自虐史観」という言葉は、歴史修正主義の先駆けになった藤岡信勝さんが使い始めた言葉ですが、明確な定

義がありません。なんとなく自分たちの社会、自分たちの国の軍隊がやった悪いことを問題にするという歴史認識の仕方みたいな、漠然としたイメージを持たせながら、それは子どもたちのためによくはないものだというような政治的主張に利用する、そういうことのために編み出された言葉だと思います。

さらに厳密にいうと、いちばん最初にメディアでそれを使ったのは、広島中国新聞だと思います。

私の資料の6ページ目[A]に陣中日誌があります。日本陸軍が中隊規模で公式記録として残すことを義務付けられていた陣中日誌、中隊長の副官クラスの兵士たちが交代で、自分の中隊は今日はどういうことをしました、ということ、毎日の日記として書き留めたものです。この資料では省略していますが、そこでは、この中隊に本日在籍していたのは何人で、だれだれが陸軍病院から復帰しました、だれだれは治療のためにどこどここの病院に異動しました、というような人の異動のことを非常に細かく書いてあります。これは後に軍人恩給を計算するときのその期間を確定するための証拠資料になるそうです。その意味で非常に細かく書くことを義務づけられていたものです。

その公式記録である陣中日誌を私のツアーに参加して下さった横浜の関東学院大学の林博史さんが見つけ出しました。林さんは、ツアーの5回目の87年の時に参加して、マレー半島の住民虐殺の様子をあちこちの追悼碑や証言者から聞かされたあと、日本側の資料はどうなっているのだろうということで、帰国後に調査に着手していました。林さんは一橋大学で藤原彰さんの指導を受けられた研究者です。帰国後の9月そうそうに、恵比寿にある当時の防衛庁いまの防衛省の研修所の図書館に行って、資料のカードを検索していたら、陣中日誌が出てきた。それを閲覧したいという事で出してもらって見たら、住民虐殺を実行した部隊のその時の日誌だったというものです。

実は、こうした日誌が出てくるのは、不思議でもあるのです。敗戦の時のポツダム宣言の第10項には、戦犯責任は厳しく追及する、特に捕虜に対する国際法違反の蛮行については見過ごせない旨明記されていたのです。そこで日本軍は、そういう追及をかわすために証拠資料は焼却せよという事を全軍に指示していました。このために、陣中日誌類はほとんど焼かれて破棄されているそうです。それは軍隊だけではなく警察関係でもそういう指示をしています。のちに文部大臣になった奥野誠亮さんは内務省の警察担当の課長だったそうです。敗戦の時にポツダム宣言のことがあるので、交通事情の悪い時に、日本国内の警察を駆け回って警察幹部に証拠資料を焼けという指示をしたので、それで戦後救われた人が相当いるはずだということを、内務省官僚のOB会の座談会でしゃべったのが、そのOB会の会報に載っているのです。そのなかに「慰安婦」強制関

係の記録も含まれていたのが焼かれたとも言っているようです。その発言が内務省のOB会の会報に2回載っているのです。そのことを「慰安婦」問題を追及している人たちが掘り起こしていたので、私も使わせてもらっています。

ところで、この資料6 ページ右上[A]に陣中日誌の表紙がありますが、その第11連隊が属していた広島第5師団は、シンガポールを占領した後、マッカーサーが逃げたオーストラリアからフィリピンに戻ろうとするのを遮断するために、インドネシアの島々に分散して駐屯させられるのです。ところが逆にそれが、制海権は奪われたところで、第5師団の各部隊は孤立してしまいます。やがて敗戦の少し前に、第11連隊はイギリス軍が総反撃しそうなのでシンガポールに戻ってこいと指示をされます。けれども、もう数千人が一度に乗れるような大きな船が残っていない、わずかに病院船だけが残っている、陸軍に徴用されて、病院船としてフィリピン方面で行動していたのが橘丸です。さすがに病院船は連合軍から攻撃されなかったのです。それを使おうという事で、第11連隊全員が傷病兵のふりをして、そういう台帳も作って、武器は全部船底に隠して乗り込みました。出航して半日後に米海軍の艦船に出会い、臨検を受けます。上手く隠せそうだなと思っていたら一番底に隠していた武器が見つかってしまいます。これは偽装船だ、国際法違反だということが露見してしまい、第11連隊まるごと拿捕されてマニラに連れていかれました。マニラに着いた数日後に日本は敗戦になります。この結果、この陣中日誌を焼く暇がなかったのです。

この陣中日誌をアメリカ側が裁判の資料として使った後で、もう必要がないとして日本政府に返してきました。それを防衛庁が研修所での戦史づくりの資料として使っています。その後で、別に問題ないだろうということで、一般閲覧できるように図書カードを作って出しておいたのを林さんが見つけたのです。

ところが、その日誌の中身である下の[C]を見ると、具体的に今日は何人殺したと書いてあるものですから、とんでもない話になります。

当然アジアの人たちはこういう事実を十分知っています。目撃者もたくさんいます。ほかにもいろんな事件が起きているということを現地の方がおっしゃる。私たちは、そうした証言者がまだ健在なうちにお話を聞かせていただきたい、ということで、毎年繰り返しツアーを組んで伺っては、嫌な話を思い出してもらいながら聞かせていただいているわけです。

現在でも、日本人の顔をみるのはいやだということで、まわりの人が随分説得しても最後まで会ってくださらなかった方もいらっしゃいます。私たちのために説得して頂いた方が叱られるそうです。「あんたも被害を受けた側なのに、なんで日本人に協力する

んだ。」と言い返されたりするのだそうです。やはり時間が遅かったのだなと思います。私たちが事件のあった場所へ行ったときに小石を投げられたり、どなられたりしました。また私が事前の下調べのために通訳の人の案内で歩き回った時にも、なぜ日本人がこんなところに来たのかということで、2, 3 時間つるし上げに遭うということも経験しました。殴りかけられそうになったこともあります。でも、日本人もいろいろなんだ、こういう人も相当数いるんだ、だからこうして毎年グループで来ているんじゃないかということで、分かって下さる方も増えてきました。

最近では高校の修学旅行がシンガポールやマレーシアにも出かけています。若い世代もずいぶん行く機会がふえてきました。その中の一部には、そういう戦時中の出来事を確認したり、体験を聞くというコースを設定する学校もあって、それに一定の数の生徒たちも参加するという状況もできています。すこしずつ私たちが取り組んできたことが、若い人たちが入っても抵抗なく受け入れてもらえる状況を作れるようになったかなという気がします。

そういう取り組みをしている日本人がいる。この東南アジアのことに限らず、南京事件のことにしても毎年こうして活動しているということはあちらの新聞もかなり関心を持って報道してくれています。そういう意味で、南京事件に関する皆さんの取り組みは中国戦線のことだけで話題になっているのではないということにもなっています。

安倍首相は、「70 年談話」で 95 年の村山談話をどこまでひっくり返すつもりでいるだろうかという事をアジアの人たちは注視しています。さらに、それを日本の人たちはどこまで止められるか、私たちの責任を問うていると思います。今度の選挙で、安倍さんは数の上ではそう打撃にはならないという予測がされていますが、仮に安倍政権が多数を占めたとしても、村山談話は簡単にひっくり返させるものではないぞということを改めてみなさんと確認したいと思います。

1 ページの左端 **B** の新聞記事をご覧ください。村山談話無視を露骨にやったら、アメリカとの関係がまずくなるということで、70 年談話を出すこと自体却って具合が悪いということ、自民党、政権の中でも指摘する声がある、と言っています。選挙の結果が安倍さんにとって表向き具合のいい多数の議席獲得となったら、これだけ有利なおまへはやらないのかと、靖国参拝などを要求している遺族会その他の保守勢力から突き上げられるはず。けれどもその通りにやったら、今度はアメリカから叱られるということで、板挟みの状況に立たされると。もし、選挙で議席が減ったらこの厳しい結果が出たから考え直していますという言い訳ができるけれど、そういう言い訳

の材料がなくなるはずです。

そこで安倍さんの本心がどこにあるかを見極められることになるのではないかと思います。安倍さんは、しょせん歴史修正主義の言動も支持率を維持するために、保守派の顔色を窺ってやっているという部分が強いのではないかと思います。彼は天皇、皇后さえ利用しています。靖国参拝にしても遺族会の支持を得るためという計算です。彼はとにかく憲法改正で歴史に名を残したい。財界の意向を汲んで、憲法改正にあわせて、自衛隊を正規の軍隊にしたら、核武装までもっていきたいという思惑が最大の眼目です。こういう板挟みの状態になったときに、彼はこれまでの言動で矛盾の前に立たされることになるのではないかと思いますから、私たちは選挙結果がどうなろうとひるむことはないのではないのでしょうか。

それに関係して、2 ページ目です。

私が関わっている社会科教育、その中でも歴史認識に関わるところで、政府は今年1月、教科書検定では、閣議決定された政府見解がある場合はそれに触れた記述を盛り込むこと、という規定を強引に設定しました。

ここにありますのは、その案がでてきた去年の11月の時の朝日新聞の記事です。ここでは、どういうことからこんな案がでてきたのかということが解説として書かれています。まだ案の段階のことをとりあげた記事ですが、よく分析していますので資料としてはこれを使いました。

ここでは、下から2段目の私が傍線を付けたところに注目してください。南京事件や「従軍慰安婦」問題などで、安倍首相が露骨に言っている歴史修正主義的な感覚での政府見解が閣議決定されていますので、それを教科書に書かせようということなのだということが見え見えだとしています。それはあまりにも露骨ではないかという批判がとびかかったのに対して、文科相は12月から1月にかけて、一般世論の声を聞きますということで、いわゆるパブリックコメントを募集しました。1月14日締め切りで、1万4千件の声が寄せられ、その大半がこういう基準設定に反対だったということが後で国会に報告されています。その整理は教科書課が担当ですが、14日に締め切られて1万数千件ありますから時間がかかるはずなのに、その整理が終わらないうちの1月17日にもう官報に告示して、正式にこの検定基準を決めてしまったのです。パブリックコメントがいかにも形式的で、いいわけのためのものでしかないかが見えると思います。

そういう決定をするのであれば、私たちもやりようがあるぞと思いました。それが3

ページ目の村山談話です。

政府の中でも一部では、早い段階に、こういう基準を作ったら村山談話が逆手に使われないかと内々に話をしているということは聞いていました。村山談話が 95 年に出されて、政府の考えと安倍首相の考えとは正反対のものになっている、だから 70 年談話を来年だそうということに安倍さんはこだわっているのだと思います。

その村山談話を普段あまり目にするのがないと思いますので、3 ページ目の右下の **C** に後半部分を引用しています。

「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、……ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。」

明確に「謝罪・反省」を表現していますが、これが閣議決定で、満場一致なのですね。当時は社民党、さきがけ、自民党の連立政権で大臣の大半は自民党で平沼赳夫とかそうそうたるタカ派がいたのですが、閣議では誰一人異議を唱えなかった。満場一致で 8 月 15 日に閣議決定したのです。誰一人異議を唱えなかったということ自体が当時注目され、新聞でも大きく報道されています。

左端の **E** を見てください。今年 3 月の衆議院の文部科学委員会で、共産党の宮本さんが下村大臣に、村山談話は新しく決めた検定基準にある政府見解に当たるのかと聞きましたら、下村大臣はあれは閣議決定していませんから、該当しませんという答弁をしました。あきらかにその事実を誤認しています。官房長官の河野談話は閣議決定ではありませんが、村山談話は村山首相談話ですから閣議決定になっています。安倍さんのいいなりになっている下村さんも歴史認識がお粗末だということにかけては、安倍さんに負けず劣らずであることを証明する答弁をしたのです。朝日新聞が翌日の朝刊で「下村大臣が村山談話は閣議決定ではない、だから検定基準には当たらないと答弁した」と囲み記事で載せたものですから、多くの人が気づいたそうです。後で文科省に聞きましたら、外務省からすかさずあの答弁は間違いだ、村山談話は閣議決定していると言われたそうです。答弁原稿を書いたのは文科省の若い係長クラスですが、勉強不足でした、不覚でしたとぼやいていました。でも 30 歳代の文科省の官僚が時間に追われて国会答弁の原稿を書いているときにこういう不手際があってもしかたがないかなと思います。一方で下村さんは 96 年に衆議院議員に当選している人で、文科大臣になりたいといってこういう事柄にずっと関心を持ってきた人です。その彼がただその原稿を読むだけで、自分の認識のなかで違うというのに気づけなかったというのはお粗末です。余談ですが、これがまずいということになった後で、宮本さんの事務所に、内々に議事録を書き直させ

てくれ、この答弁はなかったことにして、正しい答弁をしたことにさせてくれないかという働きかけがあったそうです。宮本さんがそれはだめだと拒否したということです。

加えて、実はその答弁原稿を文科省がつくったのが2月だったということが分かったのです。2月に別の野党の方が同じ質問をして、そのときにすでにこの答弁原稿を用意しているのです。それをまた3月に使った。2月のときにすでに間違っただ弁をしているのです。けれども報道されなかったから、私たちも気がつかない。外務省も気がつかない。文科相関係者も誰も気がつかない、ということが宮本さんとのやりとりのなかで分かったそうです。

その2月の時の議事録はとっくに出ていますから、それはもう訂正はできない。書き換えができないということで、いさぎよく3月の答弁も間違っていたと謝罪するしかないということになりました。そこで、4月の最初の委員会で質疑が始まる前に、下村大臣が「委員長、発言させてください」と求め、委員長の「大臣から要望がありますから発言を許します」との許可を得て「先日の答弁は事実を間違えておりましたので訂正します。ご迷惑をおかけしました、謝罪します」と発言しています。それがこんどは正式に議事録に載っています。

こういうお粗末な歴史認識をしている人が安倍内閣のなかの閣僚にはぞろぞろいるのではないのでしょうか。その安倍さんと一心同体で教育再生実行政策を推進している八木秀次さんもいい勝負です。そのページの[B]を見てください。彼は教育再生機構という組織の機関誌のなかで、元東大教授で山川出版の教科書の『詳説日本史』の執筆者でもあった伊藤隆さんと対談していますが、そこで、実教出版の[C]を載せている教科書のことを気にしながら、伊藤さんが「村山談話の全文を掲載している」と言っています。でも、[C]は全文ではありません。先ほど言ったように後半部分だけです。伊藤さんというのは、博士課程の院生の人から、「史料吟味が非常に厳しいおっかない先生です。尊敬しています」と聞かされたことがある人です。私はやっぱり歴史学というのはそれではいけないのかな、と思っていましたが、聞くと見るとでは大違いです。この程度の人だったのかという気がします。

村山談話を載せているのは実教出版の教科書『日本史 B』ですが、これは10年前から載せていて検定を通っている唯一の教科書です。今回の新しい基準が強引に作られたおかげで、今後はすべての歴史教科書は村山談話に触れなさい、という指示をしたことになります。執筆者は規則通りにやりましたということで、堂々と載せていいということです。これは高校だけではなくて中学校の教科書でも適用される基準ですので、私たちは、こういうところで巻き返しができる材料を手に入れているんじゃないかと思いま

す。

4 ページです。

先程来くりかえしお話しているように、安倍さんと歴史修正主義の主張を日本社会に広める上で二人三脚のようにして報道をしきりにしている産経新聞が、なんと南京事件は国際法違反の虐殺行為で違法殺害だった、ということを感じさせる記事をお子向けの連載のなかでさらっと書いているのを見つけました。ここに全文を載せてあります。

記事の一番下の段の☆印を付けてくくっているところです。逃げまどった中国側の兵士が日本兵に隠れて軍服を脱ぎ捨てて、中国の一般の人の作業着、便衣に着替えているのを日本側が捕まえて、それを殺害したというケースがたくさんあったということは歴史修正主義者の人たちも認めています。藤岡信勝氏は最たる方で、その軍服を脱ぎ捨てるということは国際法違反だと強調しています。正規の捕虜としての扱いを受けるためには、兵士は最後まで兵士であることが分かる軍服を脱ぎ捨ててはいけないうことになっている。それなのに軍服を脱ぎ捨てたのだから、それは国際法違反の存在になったわけで、スパイと同じだ。だとしたらスパイは殺害してもいいわけだ。国際法違反をした兵士だから、ということで、便衣に着替えた中国兵を現場で殺害するというのは別に問題ではない、違法殺害ではないから虐殺ではないのだ、という主張です。

そういうケースでの殺害が大半だから、南京事件の殺害というのはゼロに近いのだという、名古屋の河村市長と同じレベルのことを声高に言っているのが藤岡氏です。いましきりと平沼さんたちが河村市長がんばれというキャンペーンをやっています。それに対して、次の☆印のところで「正当な裁判も経ずに殺された捕虜もいた」とこの記事にはあります。ぼかした言い方していますが、「正当な裁判も経ずに」という表現が産経に初めて登場したのです。本来裁判をやらなければいけないのだが、ということをごどこかで言わなければいけないと前から考えていたのだなということが分かります。この連載は、皿木さんという論説委員長をやっていた人が一人で毎週日曜日の紙面で書いているのですが、その皿木さんが属していた論説委員室が実は秦郁彦さんに論文インタビューをしたなかで、スパイといえども、裁判をしなければ死刑にはいけないというのが国際法だという説明を受けて、それを産経がきちんと紙面に載せたのです。

それに関連して、5 ページの資料をご覧ください。

その日付をご覧ください。1994 年の 7 月 1 日から 4 日間連続で産経が載せたものです。5 ページでそれを抜粋していますが、94 年の段階での秦さんの発言です。私がおこ

ろどころ波線を付けておきましたが、捕虜といえども、スパイとして捕まえた者でも、処刑する前に裁判をしなければいけない、それが国際法ですからということを秦さんは言っています。とくに最後の結論部分で、質問している側が「不法殺害に相当するわけですね」と聞きましたら、秦さんが「そうなんですよ」「処刑されてもしかたがないのですが、その前に裁判をしなければいけません。」ですから、「不法殺害ですよ」ということを繰り返し認めています。

ハーグ陸戦協定とはそうだったのかと、私もこれで学ばされたのですが、次の6ページの[E]に国際条約集のなかから、その陸戦協定の条文を引用しておきました。「第二章 間諜」(スパイ)について、第30条で「【間諜の裁判】現行中捕ヘラレタル間諜ハ、つまりスパイ行為をしている現行犯で捕まえたスパイは、「裁判ヲ経ルニ非サレハ、之ヲ罰スルコトヲ得ス」つまり裁判をしてからでなければ処刑などの罰を加えてはいけない、ということが明記されています。従って、南京でもそういう便衣兵をスパイとみなしていいんだという藤岡さんの論理を仮に認めたとしても、その後裁判をしていないのだから「違法殺害」だということになります。藤岡さんはどう弁解するのだと、公開質問などで問いただしたいところです。でも彼は、これまでに何度も「貴方の言っていることはおかしいよ」と指摘しても、全然応えないで、「だけどね」と言って前と同じことを言う人です。論争していくと、こちらの方が後でくたびれてしまうのです。ですから、やってみても無駄かなとは思いますが。

先ほどの教科書検定の新しい基準で、政府見解について触れるように、ということがありました。南京事件については、被害者の数については今も論争が続いている、実態はまだ確認できていないという政府見解が質問趣意書の答弁で出されています。そういうふうに教科書は書かせて、うやむやの教科書記述にさせようとしている様子が見えます。それならばそれで、なぜそういううやむやにしかならない議論が半世紀以上も続いているのか、という問いを生徒に投げかければいいのです。本来裁判をやるべき国際法を日本側が守らなかったからだ、ということに政府答弁を利用して話を進めるのです。

もし裁判をしていれば、中国側が言っている30万人という数に対して、日本側は、個人名を含めた犠牲者の数も明確に何万何千何百何十何人ですと、しっかりとした数字をもって示すことができるはずなのです。国際法を無視した結果、それをできないような状況を、日本側がつくったのではないかと、中学生、高校生に気づかせることが出来ます。政府が数の論争が続いているという立場を取っているというならば、それに教科書執筆者の側は、そうなったのは、実は国際法を守ってないからだということを書き足してもらいたい、そういう「国際法を守っていない」ということを産経でさえこれだけ

くり返して書いているのですから遠慮は無用です。

もともと、そういう授業をやるのは偏向教育だと一部の日本会議の政治家たちが地方議会などで騒ぎ立てるかもしれません。でもそれは、朝日の記事であれば相手は勢いづくかもしれませんが、産経の記事を使っているのですから、たとえば充分弾よけの効果が期待できるのではないのでしょうか。

なお話が前後しますが、このハーグ陸戦協定の規定は南京事件についてだけでなく、他の地域での殺害事件にも当てはまるわけですから、マレー半島での虐殺や沖縄での住民虐殺も違法殺害であると、法的に証明できることになります。今回、私がこの会でマレーシアでの住民虐殺について説明した理由の一つが、ここにあります。

7 ページの資料は、安倍首相は歴史的事実をどの程度わかっているのかなと思いつながら載せたものです。歴史の教科書も東南アジアでの戦闘の様子についてはあまり正確に書いてくれない、という思いを私はずっと持ってきました。といいますのは、12月8日の対英米開戦の時は真珠湾攻撃が最初ではなくて、マレー半島のコタバルへの上陸が最初だったのです。マレー半島の英領マレーとタイ領の境のあたり、東海岸のコタバルに英国軍の空軍基地がありました。そのすぐ北のタイ領に日本軍の本隊が上陸する予定でしたので、海岸で空から攻撃されると大被害がでます。上陸開始の前にその英国の空軍基地を制圧しようということで、**G**、0215（日本時間に換算してありますが）、「12月8日の午前2時15分 侘美支隊のコタバル第一次上陸部隊が敵岸に達着した」のです。生き残った兵士の体験記を読みますと、暗闇の中を海岸に迫ったら、エンジン音を聞きつけた海岸のトーチカから機関銃で撃ってきた。砂浜に降りる前に撃ち合いが始まっていたということだそうです。その時刻が午前2時15分、そして真珠湾の方は0320つまり1時間後の午前3時20分に始まっているのです。

いまでも一部のマスコミは12月8日の関係の報道で、「アジア太平洋戦争が始まった真珠湾攻撃の日が12月8日、今日ですね」などという出だしの説明をよくやっています。もうそういう説明はいい加減卒業してもらいたい。あの戦争は、東南アジアで軍事行動をする日本軍の行動、そしてそこを占領して、石油などの資源を手に入れた船が日本へ行き来するのを、米軍の艦船がじゃまするのをゆるさないぞということで、日本軍が奇襲の先制攻撃で叩くしかないということで、ハワイに行っただけなのです。ですから日本軍は一撃ただけで帰ってきたわけです。

あの戦争の一番の狙いは、中国戦線が南京を落としたところで、重慶に国民政府は逃げてしまって泥沼の戦いになったところで、米国が石油を売ってくれなくなったので、

スマトラ島にあるパレンバンの油田を占領することでした。さらに、マレー半島の鉄鉱資源などを手に入れることを含めて、東南アジアの資源地帯を他所の国の植民地から横取りしようとして始めた戦争だったのです。その本質を象徴する意味でも、コタバルが先だったということは大事です。この資料を丹念に見ていただきたいのですが、**A**、**B**の中学、高校の、80年代、90年代の古い教科書では真珠湾のこししか書いてありません。それに対して、私たちは、この30年来、「マレー半島が先だと書いてください」と言ってきましたら、ようやく最近、**C**、**D**、**E**でだんだんそれを書かれるようになってきました。地図がついている**F**の第一学習社のものは、その地図のうえにはっきりと「1941年12月8日、日本軍のマレー半島への上陸によって太平洋戦争がはじまった」ときちんとして書いてくれるところまでできました。とすれば、教師はその意味を教科書を使ってきちんとして説明して欲しいなと思っていました。すると、またもや産経が「あの戦争はアジアを解放するためではなかった、最大の戦争目的は石油だった」と書いているのです。これが8ページの資料です。

これを書いた皿木さんは論説委員をした人です。先程の秦郁彦さんのインタビュー記事を書いたのは論説室の仕事だと最後に書いてあります。案外あのインタビューをやったのは皿木さんではないかという気さえしてきます。94年のインタビューの時から、これが真実だと彼が気づいていたのを今の時点で、書かざるをえないかなとして書いたのではないかと思います。明らかに産経の社論と異なることを書いたのですから、この姿勢を維持できるのか、注目しています。

この記事も学校現場のみなさんにはぜひ活用していただきたいです。

9ページの話は、それと同時にタイ領でも、第5師団の本隊が上陸したとき、タイは独立国でしたので、日タイ戦争を半日間やっているという事実です。これをほとんどの新聞が紹介していない、他のマスコミも紹介していないことがらです。しかし、9ページの左**C**の朝日新聞の記事は詳しく紹介しています。これが実は、86年に大阪本社版にだけ載ったのです。大阪本社の外報部員の宇佐波さんが書いたもので、東京本社版には載っていません。だから縮刷版にもありません。大阪の教員仲間が教えてくれて私はコピーを手に入れたのです。これは明らかに、独立国の主権を侵害した国際法違反の侵略行為です。その行為をした日本軍の責任者は元首である昭和天皇にあるはずです。その昭和天皇を戦犯にしないということにしたのが東京裁判の最大の眼目です。その責任を東条たちにすべて押しつけることにしていたのが東京裁判です。あの裁判は、ある意味筋書きができたお芝居だったわけです。そのことを広く国民に気づかれるのは戦後の

保守政権にとってたいへん困ったこととなります。それを読み取っているマスコミも知らんぷりをする。そのためにはコタバルのことは知らないフリをして、真珠湾だ、真珠湾だと、12月8日の話題は半世紀以上一般の人の目をごまかし続けるということをやってきたのではないのでしょうか。そういう点で、教科書がここまで書いて、産経もこういう記事を載せるまでになったのです。今年の12月8日の各新聞の報道はどうかと注目していましたが、旧態依然のままでも物足りないものばかりでした。情けない話です。

10 ページ目です。

そういう状況になっている日本のすがたを予見したアジアのリーダーがいたのです。シンガポールのリ・クワンユー氏です。現役首相時代の1990年にヨーロッパを歴訪したときのことです。最後のパリでの演説で、「フランス人から見れば戦争責任をしっかりと反省しているドイツの様子をみていて安心でいられていいですね。それに比べて、同じ同盟国だった日本は心配でたまりません。でも、アジアで日本を抑えられる国はどこもないから、ヨーロッパの国も注目してください」と呼びかけたのです。さらに「一番こわいのは世代交代によって自民党のなかでもあの加藤紘一さんや野中広務さん、後藤田政晴さんのような戦争はもうこりごりとしている人たちが引退してしまった後です。戦争を知らない世代が主導するようになると安保条約も破棄して勝手に核武装するという方向に行く危険性があるわけですから」と、指摘したのです。今その通りになりつつあります。アジアの人たちが予測していたことを、日本人はどれだけちゃんと見通して対応が取れているか、ということ、今わたしたちは問われているのではないのでしょうか。

私たちは、今日、南京の生存者の証言を聞いて、歴史の事実を確認するだけでは、アジアの人を安心させるものになっていないのではないのでしょうか。アジアの人たちの方が、こういう日本の状況をはるかに以前から予想していますので、外部から言われる前に、どれだけ私たちが自浄力を発揮するかに注目しているのではないのでしょうか。

最後に、資料の最初にもう一度もどります。安倍首相は、東京裁判に関して「連合国の勝者の判断によって断罪されたと思う。歴史への評価は専門家に任せるべき問題ではないか」と言っているのです。私は大いに議論したいと思います。昭和天皇は本来戦犯にされるべき存在だと思っています。それについて議論するきっかけを安倍さんが積極的

につくってくれているわけです。貴方に協力しますよと、これまで述べてきたような事実を彼に突きつけるという取り組みをしたいと思っています。同調していただける方はいっしょにやっていきましょう。そうすることで、アジアの人々との連携を強めていきたいと思っています。盛りだくさんの内容になってしまいました。最後までおつきあいしてくださりありがとうございました。